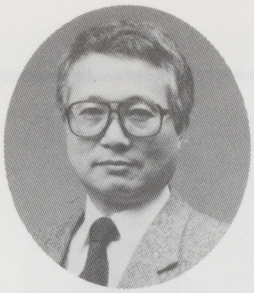
巻　頭　言



「アポロ計画とミケランジェロ」

ヤマハ技術会顧問
山下隆一

アポロ計画で人類が月に着陸してちょうど20年目。手に汗を握り「歴史的瞬間」を目のあたりにして，ふた昔分もの歳月が流れたことになる。

以来，「システム」，「システム工学」という言葉が使われだし，「ある目的のためにいくつかの要素が有機的に結合すること」との「システム」の基本定義は今や広範な分野において、相当な解釈を受け，定着している。「システム」はコンピューターによる処理の普及と相まって，「生産性向上」「合理化」というテーマに大きな貢献をはたした。

その意味でアームストロング船長以下３名の飛行士に贈られた文化勲章―当時は大変な物議をかもしもしたが―今日、その意義について理解も成り立つというわけだ。

一方，確かに「イメージを具現化」するプロセスにおいては，システマチックな考え方やコンピューターが大きな助けとなっている事は否定の余地はないが，やや唐突ながら，「創造のプロセス」にはどのような進歩があったのであろうか？

幸田露伴は，「五重塔」において，「利己主義者」，「石頭」，とあらゆる悪口雑言にも耳をかさず頑に「効率化」―「分業化」―「イメージの妥協」のプロセスを拒否し，一人で企画，設計建築，そしてメンテナンスをする事で五重塔を完成させてゆく職人，「十兵衛」の姿を見事に描き出している。往事，西洋から移入され，多分，都合よく翻訳されていた「合理性」という仮り物の概念に対する強烈なアンチテーゼと考えれば今もって大変新鮮に感じられる。

ところで，その「合理性」の発祥地であるとされるヨーロッパではこの問題がどう扱われたのか？しばしば「人間復興」と訳されるルネッサンスの時代に生きたミケランジェロですら，多作家である為に要求された合理性と自分自身に折合いを付けられずに死ぬまで煩悶し，ロマン―ロランの言葉をかりれば，「悲そうな天才力とそうでなかった彼の意志の間の（つまり）『やむにやまれぬ熱情』と，『あえて求めなかった彼の意志』の間の切実なる矛盾」に答えを出せなかったという。

更に，ロランはミケランジェロの創作活動に関し，「熱狂的な激昂であり，彼の肉体と精神すらそれを保てなかった」とし，天才とは理性的な判断によりどころをおくものであったのではなく，むしろもっと潜在的な恐ろしいまでの感情的なエネルギーであった事を指摘している。すなわち「創造」のための格闘には人間の根源にある「なにか」以外の何ものもかかわることの出来ないということにほかならない。

既成の概念やしくみを創造的に「破壊」して行くことは困難を極めるものであり，又，急激な変化は時として混乱をまねくこともあろう。しかしながら豊かなイマジネーションこそが当社にとって最も重要な財産である。「創造の」プロセスにおける個々の「やむにやまれる熱情」がどのように発露され，又，全体的に展開されるかということが，将来を見通しする上で，極めて重要であり，その重要度は急速に高まっている。すなわち高い次元で「イメージ」できるための何かとイメージの通りに具体化するための何かが緊急のうちにそれぞれ別個に，しかしながら有機的に認識されなくてはならない。そこで，ひとり，ひとり「内なる熱狂的な激昂」つまり，「一番大切なもの」を自省し，その上で「自己」と「システム」との折り合いのつけ方を考えて頂くこと。それこそが現在においても過去においても「ある種の常識」を打破する上でまず最初に探究され得べき課題であることを提案させて頂き本年の皆さんの御活躍をお祈り申し上げます。